世界連邦運動協会石川県連合会　平成 27 年度 理事会・総会
講話予稿

戦後 70 年に当たって～1945 年生は語る～

平口　哲夫

１．1945 年生まれの私の思い

私は 1945 年(昭和 20 年)4 月 4 日に母親の実家で生まれた。生まれ故郷の敦賀市は、私が生まれてちょうど百日目の 7 月 12 日深夜に米軍の B29 爆撃編隊による空襲を受け、実家は灰燼に帰した。当時実家には、祖母と女中と、満州（現在の中国東北部）から一時帰国していた伯父夫妻、お産のために 6 歳の兄と 5 歳の姉を連れて里帰りしていた母、肺結核を患って嫁ぎ先から戻されていた伯母（母の 2 番目の姉）が同居していた。

当時、大空襲を受けた大阪などから退避してきた軍隊が敦賀に集合していたので､伯父は｢敦賀も危ないから、京都の田舎にでも疎開したらどうか｣と祖母に勧めたが、江戸時代以来の旧家を空けるなんてご先祖様に申し訳ないと、祖母は承諾しなかった。伯父の不安は的中し、ラジオが空襲警報を発令している最中に早くも爆撃機の爆音が響いてきたので、伯父が「どこか広いところに逃げなさい。防空壕に入ったら蒸し焼きになるぞ！」と叫んだので、母は私を背負い、大きな衣類を頭から被せ、姉の手を引いて、まずは気比神社の境内に逃げた。しかし、やがて気比神社も焼夷弾をあびて燃え出したので、近くの田んぼに移動し、難を逃れたとのこと。金沢に単身赴任していた父が迎えにきて、祖母、母、兄、姉、私の 5 人は丸岡の玄女にある父方の実家に一時、身を寄せたが、その地で祖母は亡くなった。その年のうちに一家全員が金沢に移ったので、私は 0 歳の途中から金沢で育ったわけである。

父は母と婿養子縁組で結婚した当時、島根県師範学校で数学担当の教諭をしていたが、1940 年 11 月に山梨工業専門学校(山梨大学工学部の前身)教授として赴任し、さらに 1945 年 5 月に金沢工業専門学校(金沢大学工学部の前身)教授に転任した。山梨工業専門学校に在職中、父に

赤紙(国民兵召集令状)が来た。町内の人たちや同僚たちに見送られ、兵役に就くための身体検査を受けたところ、重い痔疾であったため、軍医から「養生したまえ！」と尻をペシッと叩かれただけですみ、兵役を免除された。もし父が戦地に赴いていたら、私は生まれて来なかったかもしれない。東北大学在学中に帰省した際、「武運長久を祈る」などと書かれたヨレヨレの人絹製「日の丸の旗」をタンスから取り出して見ていたところ、父が珍しく戦時中のことに触れ、「この同僚は署名したあとに赤紙が来て戦死してしまった」とポツリと言った。

私は小学生の頃まで、ときどき悪夢にうなされることがあった。その悪夢とは、真っ暗闇の中で息苦しく、身体が大きく揺さぶられ、グオーンという気味の悪い重低音が鳴り響くというものであった。成人になってから、なぜ子どものときにそのような悪夢を見たのか考えるようになり、父と違って母は、私が物心つくころから戦時中のことを繰り返し話してくれたので、その話が影響して 0 歳時の「体験」があたかも直接見たかのように悪夢となって現れたのかなと思ったりした。あるとき、NHK テレビのドキュメンタリー番組で、精神科の患者さんに催眠術をかけて過去の記憶を遡らせ病根を探るというのを見ていたら、記憶が胎児の頃まで遡る例が紹介された。胎児の記憶まで潜在的に残っているのなら、0 歳児の記憶があってもよさそうだ。以来、あの悪夢は 0 歳のときに経験した敦賀空襲の体感記憶のせいではないかと思うようになった。

子どものときに母から聞いた戦時中の話は、子どもの目には戦後の日本とは遠くかけ離れている世界のように思えたが、高校生、大学生、社会人へと経験を重ねるうちに、戦時中の出来事はさほど昔のことではなく、戦前の日本と戦後の日本を比較すると、あまり変わっていない点も多々あることに気がつくようになった。一時期、「戦後は終わった」などと盛んに言われたこともあったが、沖縄の米軍基地問題が端的に示しているように、「戦後」は未だに終わっていない。毎年、8 月 15 日の「終戦記念日」に第何回というのが自分の年齢でもあるのだが、たかだか百回にも満たないうちは、先祖返り的に似たような過ちを繰り返すおそれは多分にありえるので、特定秘密法の制定、武器輸出原則の見直し、集団的自衛権行使の容認、安保法制の制定などの動きに強い警戒心を持つのは当然だと思う。

２．われら敗戦の年生まれ

戦後 60 年に刊行された『文芸春秋』2005 年 2 月号には、「われら敗戦の年生まれ」と題して、車谷長吉（くるまたに ちょうきつ、作家、1945 年 7 月 1 日～1945 年 5 月 17 日）、櫻井よしこ（ジャーナリスト、1945 年 10 月 26 日～）、谷垣禎一（たにがき さだかず、財務大臣、1945 年 3 月 7 日～）の 3 氏による鼎談が掲載されている。これには「1945 年生まれの著名人」として 111 名のリストが付されているが、そのリストに掲載されている著名人のうち、氏名を見てすぐ顔を思い浮かべることができたのは、以下の方々である（五十音順）。

青江三奈（歌手、5 月 7 日～2000 年 7 月 2 日）、阿木耀子（作詞家、5 月 1 日～）、池澤夏樹（小説家、7 月 7 日～）、扇ひろ子（歌手、2 月 14 日～）、大谷光真（浄土真宗本願寺派 24 代門主、8 月 12 日～）、岡本行夫（元首相補佐官、外交評論家、11 月 23 日～）、小川和久（国際政治・軍事アナリスト、12 月 16 日～）、おすぎ（映画評論家、1 月 18 日～）、落合恵子（評論家、1 月 15 日～）、金井克子（モダンダンサー、6 月 17 日～）、栗原小巻（女優）、黒沢久雄（黒沢プロ社長）、黒鉄ヒロシ（漫画家）、櫻井よしこ、佐高信（さたか まこと、評論家、1 月 19 日～）、白川勝彦（元自治相、6 月 12 日～）、水前寺清子（歌手、10 月 9 日～）、田中直毅（21 世紀政策研究所理事長）、谷垣禎一、タモリ（司会者、俳優、8 月 22 日～）、永井豪（漫画家、9 月 6 日～）、中村征夫（なかむら いくお、水中写真家、7 月 1 日～）、はしだのりひこ（歌手、

1 月 7 日～)、三沢あけみ（歌手、6 月 7 日～)、波乃久里子（女優、12 月 1 日～)、樋口久子（プロゴルファー、10 月 13 日～)、ピーコ（ファッションジャーナリスト、1 月 18 日～)、松島トモ子（女優、7 月 10 日～)、松原智恵子（女優、1 月 6 日～)、宮本信子（女優、3 月 27 日～)、室伏重信（むろふし しげのぶ、陸上ハンマー投げ指導者、10 月 2 日～)、吉永小百合（女優、3 月 13 日～)、以上 32 名（原文では歌手の尾崎紀世彦が 1945 年生として紹介されていたが、1943 年生まれの間違いなので、除外)。

以上の方々に限らず、世間で活躍されている人が 1945 年生であることが分かると、この人はどういう状況で生まれたのか、また、その後どのように歩んでこられたのかということが気になる。たとえば、櫻井よしこは 10 月 26 日ベトナム・ハノイの野戦病院で日本人の両親の間に生まれ、6 月 17 日中国・天津生まれの金井克子は戦後一家で引き揚げ、7 月 10 日満州奉天生まれの松島トモ子も引き揚げ体験者、また、2 月 14 日広島生まれの扇ひろ子は 8 月 6 日に爆心地から 2km の自宅で被曝し、父を亡くしている。

３．親たちの思い

私の母校である金沢市立十一屋小学校『文集六年　卒業記念号』(1958) に寄せられた、親たちの感想には終戦前後の苦労が偲ばれる。

「思えば終戦時に出生し続いて引揚げと、本当に今あの当時のようすを考えると、肌に粟を生ずる思いで一杯です。よくも幼いながらも命があったものと、すこやかに成長してくれたわが子をみるたびに、感無量のものがあります」

「この間の事情をおはなしすれば、長い時間と現実に生きる道の如何にきびしいものであるかを、信じられない事実を悟らねばなりません」

「妻のおなかに我子を抱いたまま、今日も明日も名古屋の大空襲の真最中に、何度死を覚悟したかわからなかった」

「妻の身より産まれてまもなく、背中におんぶされ空襲に逃げまどうあの悲惨なありさま、倒壊された建物の下より掘出された死体の数々、目をおおう無惨な姿、妻の背中に泣き声をあげて乳を求める長男の姿が目に浮かぶ」

「誰もいない仏間で、お父さん見て下さいとひとり申して、必ず良い子になります、ご安心下さいと報告いたしました」

「無気味な空襲のサイレン下に、日本を遠くはなれた満州の地に末っ子として産声をあげ、疎開につぐ内地帰国と、生まれ早々にしてあわただしい運命に支配されたこの子」

「空を征く日の丸の飛行機が次第に数少なくなるにつれて、米軍機の来襲が加速度的に多くなり、戦局の重大さがひしひしと感じられ、祝いを述べてくれる戦友ともども、わが子の顔は現世では見られぬだろうと語りあったものでした」

「南満州の片すみにてソ連軍や中共軍の圧迫にたえしのび、どうしても元気な男の子を生みたいと、自分自身をむち打ちながら不安な日々を送りつづけていたその夜、生憎と父さんはソ連の摂取した工場の夜警に廻され、三つの姉さんと二人きりで雪深い寂しい晩、母さんはあなたを生んだのです」

「食糧の不充分な当時は全く乳の出がとまってしまった。朝夕の牛乳は、半分は水でうすめられて、幾月たっても生れてまもない顔をしていた」

「昭和 28 年 7 月ようやく日本に帰ることができたよろこびよりも、全然日本語のはなせない 3 人の子供たちをみるとき、入学後はどうなるだろうと、その不安でとても苦しかった」

「乳児のときは思うように哺乳もできず、またミルクも配給で思うように入手できず、親子

共々泣きあかした」
「台湾の中部よりやや南、義嘉、その一つ先の水上というところが〇ちゃんの生れた土地なのです。母さんは大きな腹をかかえて、空襲をさけるため夜の山道を３時間半ばかり、荷物をつんだ牛車の後を、それも先発の父のあとを追って、関子領という温泉のふもとまで、とぼとぼと歩いていきました」
「無気味な空襲警報のサイレンの音。素掘りの防空壕の土が時々ざらざらとくずれる。私は柳行李を守ってじっと息をつめている。行李の中で〇子が無心にすやすやとねむっている」
「８月の炎天下､満州奉天の駅前は､走りくるうトラックとそかいの人たちで雑踏をきわめ、馬糞くさい埃がたちこめている。どことも知れず妻と子をそかいさせねばならぬ。もう生きてはあえぬだろう」

４．池澤夏樹の「新世紀へようこそ」

2001 年 9 月 11 日に起きたアメリカ同時多発テロ事件をきっかけに池澤夏樹が始めたメール・マガジン「新世紀へようこそ」は、ご本人が日刊で発信するコラムに読者が返信することができる仕組みになっていたので、私も何回か返信した。このメール・マガジンの最初のコラム 51 回分と返信 67 本と書下ろしコメントをまとめたものが 2002 年 3 月に光文社から刊行され、返信者の一人である私にも 1 冊贈呈されている。この本の改訂電子版は、インターネットで購読することができる（http://www.impala.jp/e-books/sinseikiplus.html）。以下は、そのサイトからの引用である。

解説

2001 年 9 月 11 日の同時多発テロをきっかけに、池澤夏樹はその思索の言葉をメルマガで発信することを始めた。毎日書き、読者からの返信に応答し、議論を促した。衝撃の事件はなぜ起きたのか、その後はいかなる時代となるのか、静かな揺るぎないまなざしで世界を見つめ、対話を求めた。その記録は今もなお道しるべとして鮮やかだ。

書き下ろしエッセイ「この十三年間、この世界」より(抜粋)

今になって振り返って見れば、ぼくたちはあの時、9・11 を機に大急ぎで必死になって「現代」というテーマを勉強したのだ。
何がことを動かす力なのか？
国と武力と資本の論理なのか？
個人と生活と倫理なのか？
闘争と混乱はどこまでが人間の本然で、どこからが国際金融資本が万事を支配する現代の問題なのか？
そもそも資本主義というこのシステムの基本原理は何か？
それを言うなら、利子とは何か？
日本は外交と軍事においてアメリカに追従するだけでいいのか？
――　中略　――
こういうことすべてが、ぼくの場合、他の多くの人の場合、あの日から、つまり 9・11 から始まった。
（『新世紀へようこそ＋』収録）